

## 人の生と死（一）

### ——入山義英君こと

人の死は、いつも悲しく寂しい。若い人の場合は、それに加えて、いかにもくやしい。テオア会の教友入山ゆき子さんの長男義英君がなくなった。三十歳であった。あとに奥さんの好子さんと、三人の幼い子どもたち（五、三、二歳）残された。家族のことを思い、やつと軌道に乗った酪農経営による将来の生活設計のことを考えて、彼自身どんなに心の残りであったことか。

「こんな馬鹿なことが、どうして・・・」と、お母さんは絶句した。入山さんは東京で看護婦をしていたが、戦争末期ご主人とともに、ご自分の郷里に近い八ヶ岳山麓に疎開、終戦とともに現在の山梨県長坂町桜畑の地に入植した。慣れない重労働がたたって、ご主人は間もなく他界、時に義英君は七歳、開拓地で生まれた弟の薫君は三歳であった。それからの十数年、入山さんはひたすらに働いて子供たちを育てた。畑地と言っても国から払い下げられた石だらけの荒地地を、鋳一本で嘗々と開墾し、モロコシを植え、ジャガイモを作った。その血のにじむような労苦の中で、息子達は立派に育っていった。高校を卒業して、二人ともカメラのヤシカに勤務するようになって、入山さんは一応の責任を果たした。

開拓農家が現金収入をもとめて、やれタバコだ、やれ野菜だとさわぎまわるとき、入山さんは決してそれに引きずられることはなかった。入山さんには農業経営に対するはつきりした哲学と主義があった。だから、高度経済成長の波に乗ってあの田舎まで土地ブームが押し寄せ、近隣の殆どの農家が土地を売って離農していった中で、入山さんはあいかかわらず土を耕し、牛を飼って農業を続けた。女ひとりで、一クセも二クセもある開拓農家の「おっちゃん」たちと上手につきあいながら、そのキリスト信仰を守って一歩も退かなかつたのである。入山さんとはも東京のある教会に属していたが、入植後は私が紹介した山本泰次郎先生の「聖書講義」誌や、私の旧友飯島正久牧師の「牧歌」誌などを読んで、どこの集まりにも属さず、独りで信仰に生きている。

私ども夫婦の入山さんとの出会いは、一九五三年三月にさかのぼる。入山さんのもっとも親しい信仰の友で、苦闘する入山さんを物心両面で一貫して支え助けてきた奥平富士子さんのご紹介で、初めて桜畑の入山家を訪ねたのであった。夜寝ていると、乾いてめくれたトントンぶきの屋根のすき間から、天井のない部屋の中に粉雪が舞って、フトンの上に向つすらと積もったのを覚えている。その年の夏から、当時結核療養のため入院をかけて家内は元氣になり、畑仕事に忙しい入山さんに代って食事の用意をしたりして、子供達と共に留守を守った。こういうわけで家内は、いわば一つの釜の飯を食った義英君と薫君が実の弟たちのように思えるらしい。二人とも東京生まれで田舎というものを持たない私共は、いつしか八ヶ岳山麓を自分たちの田舎と思うようになり、入山さんの一家は親族以上に親しい信仰の家族になっていった。最近では私がウツ症状に苦しんだ時、入山一家の主にある友情と、八ヶ岳山麓の美しい自然がどんなに大きい慰めとなったことか。

二人の、息子がそれぞれ結婚して家庭を持つと、入山さんはまた独りになった。ずっと独りでやってきたのだから寂しくはないと強がりをいっていたが、三年程前義英君が十年間勤めたヤシカをやめて牛飼いをすることに決めたとき、入山さんはどんなにかうれしかったことと思う。少々大ざっぱだが、気がよくて明るい働き者の嫁の好子さんとは、ただに気が合うだけでなく、共に祈ることのできる信仰の友どうしであった。そ

のことを入山さんは何よりも喜び感謝した。かわいい三人の孫に囲まれ、ヤシカの駐在員として遠く西ドイツにいる薫君一家にも二人の孫もでき、あいかわらず忙しく働きながらも、入山さんにやっと人並みな幸福が訪れたかに見えた。その矢先のこの突然の不幸である。「こんなことが・・・」と、すべてを知り給う方に必死に抗議したとて、だれがそれを責められようか。神様、なぜ、この充分に苦難をなめ、それに耐え、あなたに対する信仰を守り通してきたこの忠実な僕を、なぜこの上むち打たれるのですか。

この夏体調がすぐれなかった義英君が、肝炎と言われて山梨県清里の聖ルカ診療所に入院したのは去る九月六日、二十二日には精密検査を要するという事で諏訪市の日赤病院に転院した。種々の検査にもかかわらず、病気がはつきりせぬまま衰弱が加わり、わずか二か月に満たない短い療養生活の後、十月二十三日夜七時五十五分、家族に見守られて息をひきとった。直接の死因は、解剖の結果、前立腺ガンと診断された。ガンは肝臓、肺、腰の骨にまで転移していた。

義英君はヤシカの工場に勤めるようになってから薫君と一緒に諏訪に下宿し、その間日本基督教団諏訪教会に出席して信仰を与えられ、六年前結婚した好子さんと共に忠実な教会員であった。彼が諏訪に出てからは、私共は余り会う折もなく、私は彼と信仰のことについて語り合ったことは殆どない。ただ彼が酪農を始めて桜畑に戻ってからは、私どもが入山家を訪れるときはいつも、食膳に皆で内村先生の「統一日一生」を読み、輪番で折った。この折りの中に、私共のころはしっかりと主イエス・キリストと父なる神に結ばれていた。

そういうわけで、わたしは彼の内面については殆ど知らない。一緒に生活していたとしても、わからなかったろう。義英君は口数の少ない、穏やかな、慎み深い人で、こころ内奥のことなど口に出して言うような人ではなかった。いつも他人のことを思いやり、黙って人のためにつくし、人の重荷をそっと負ってあげるとい

人だった。私のことなども、ここに来て休みになるかと、いつも気を使ってくれた。それでいて物事の判断などは、なかなか鋭く、しつかりしていた。早く死ぬ人はこういうものなのだろうか。若いのに余り出来すぎていて、私のような未熟な人間には、その成熟さが時にはまぶしく思われたほどである。

その彼がこの夏私に、いつかゆつくり話をしたいと申しした。なにぶん高原の酪農家にとって夏は猫の手も借りたい程の忙しさである。それでは秋になって仕事がひと片付きしたら、今度来た時にでも、と言ったのだが、次にあったのはもう清里の病院であった。急性肝炎らしいから、過労のためだろう、ゆつくり休みさえすれば必ず快くなる。牛飼いの方もしばらく入山さんが代ってやるから心配ないということであった。牛の世話が入山さんにとって何と言っても昔とった杵柄、奥さんの好子さんは清里の診療所の看護婦として勤務しているし、私共も一と安心した。その後諏訪日赤に転院したが、徐々に回復しているとばかり思っていた。

なかなか諏訪まで行くこともならず、気がかりになっていったが、十月二十一日土曜日の昼過ぎ、家内がどうしても心配だからというので入山さんに電話したところ、実は急に容態が変化して酸素を吸っている、いまそちらに電話しようと思っていたところだという。私共はとるものもとあえず、諏訪の病院へかけつけて、既に夜であったが義英君に面会した。下痢をしたとかで、わずかの間にすっかりやつれてしまっていた。肺ガンに犯されていたためか、呼吸困難で鼻から酸素を吸っていた。この時彼は苦しい息の下から私に、病氣もい、苦しいのもいい、そんなことより何かもつと大切なものがあると思う、しかしそれが何なのかまだよくわからない、それがつらく苦しい、と訴えた。私共はこの誠実な苦悩を聞いて厳肅な思いに打たれ、言葉もなく祈るのみであった。

翌二十二日、日曜日の午後再び彼を見舞った私は、昨夜の彼の言葉を思っ、聖書を持参して読んであげた。

彼は非常に喜んで、「やっぱり聖書が一番いい」と言い、もっと読んでくれと私に求めた。私はそれ以上の準備がなかったので、しばらく考えた後、ちょうどこの日の集まり（休講しなければならなかったが）のために勉強していたローマ書八章を読んだ。余り長くなって疲れてはと思い、それだけに、祈りを共にした。私が神の賜る平安を祈ると、彼は小さい声ながら力強くアーメンと唱和した。それから家内と私はこもも彼の手を握った。体も足もやせ細っていたが、さすがに腕だけは農民のそれらしくまだ太く、しかしもう土のおいはなく白かった。彼はその手で私たちの手を握って、ニコツとほほ笑んだ。こんどは十一月はじめの連休に必ずくるからね、と言って別れたのだが、これが最後の別れとなってしまった。

義英君が「何かもっと大切なもの」といったのは何だったのか。それは、罪のゆるしと、靈魂の救いと、復活の希望とであつたにちがいない。人が死ぬときには、特に信仰者が死ぬときには、激しい靈の戦いがあるらしい。むしろ、神とサタンがその人の靈魂をうばいあつて激しく争う、と言つた方がいい。迷信的な言い方もされないが、これは私がこれまでに何度か臨終に立ち合つて、いつも確かに感じたことである。そして人はその戦いに勝つて、というより神が勝たれて、初めて平安に死ぬことができるのである。義英君もまた確かにこの戦いに勝つて、天に凱旋していったのだと私は信じる。私共にはまさかその翌日に彼に死に臨むとは思えなかつたが、いまから思えば、あの時の「聖書が一番いい」と言つたあの言葉と、あの笑顔とは、すでにその平安のしるしであつたのだろう。二十三日の夜知らせを聞いて再び桜畑へ赴いた。真夜中の三時ごろ、解剖を終つて懐かしい我が家に帰つてきた義英君の死顔は、ガンで死んだとは思えぬほど安らかなものであつた。

私はどうとう彼とゆつくり語り合うという約束を果せなかつた。しかし彼はもう私などと話し合う必要はない。いまは天の国で、すべてのことを「顔と顔とをあわせて」見て、いまだその見るところ「オボロゲ」である私たちみんなのために、一所懸命とりなしの祈りをしていてくれることであらう。

解剖の結果わかつたことだが、義英君の肝炎は相当古いものであつたという。それにガンを併発し、若いこともあつて進み具合が早かつたから一とたまりもなかつた。それにしても、もしあのまま工場勤めを続けていたら、もう少し長生きすることができたのではないか、とは誰しも思うところである。多分そうであつたらう。

彼は生まれつき体も小さく、戦中戦後の育ちということもあつて決して頑健ではなかつた。農業をするより町で会社勤めをしている方が似つかわしい体つきであつた。だからそういう生活を十年もした後、酪農に転じたということは、健康という点から見れば決して懸命ではなかつたかもしれない。しかし私はその彼の決心を聞かされたとき大いに賛成し、彼の前途を激励した。聞くところによると、その頃の彼は会社の組合のことで悩んでいたという。恐らく彼らしく皆の重荷を独りじつと負つて耐えていたのであらう。そのこともあつて、もうサラリーマン生活をやめて、母親が長年やってきた牛飼いをもう少し合理的なやり方でやってみようと思ひ立つたとしても不思議ではない。少しく自由の何たるかを知っている私は、彼のこの新しい自由な生き方を大いに祝福した。彼も自分の理想を実現すべく働きに働いた。私には酪農経営のペースが少々早すぎるように思えた程であつた。確かに彼は自分の体をすりへらすという代価を払っていたのだ。彼が早死にしたことはくやしく悲しいが、彼は最後の三年を自由に独立に、充実した生を生きぬいた。残された者にはつらいが、（生存ではなく）生活するとはこういうことなのだと思う。私たちは涙を流しながらも、なお義英君の生と死を神に感謝し、心から祝福したいと思う。人間にとつて一番貴いのは、精神の自由と靈魂の救いだからである。

神のなさることは、時に私共には不条理と映る。しかし、たとえどのようなことがあつても、神の愛を疑つてはならない。いつの日か神の義が完全に行われ、すべてのことが明らかになる時まで、信じて待たねばなら

ない。この世はたとえ「涙の谷、アコル（悩み）の谷」であろうと、主に在る私共にとってそこはすでに「泉のあるところ、望みの門」であるのだから。

（一九八八年八月二十五日記）

（所載）

『テコア通信』

（一九九八年八月十三日、入山義英君二十年、入山ゆき子さん十年

記念会のために再録）